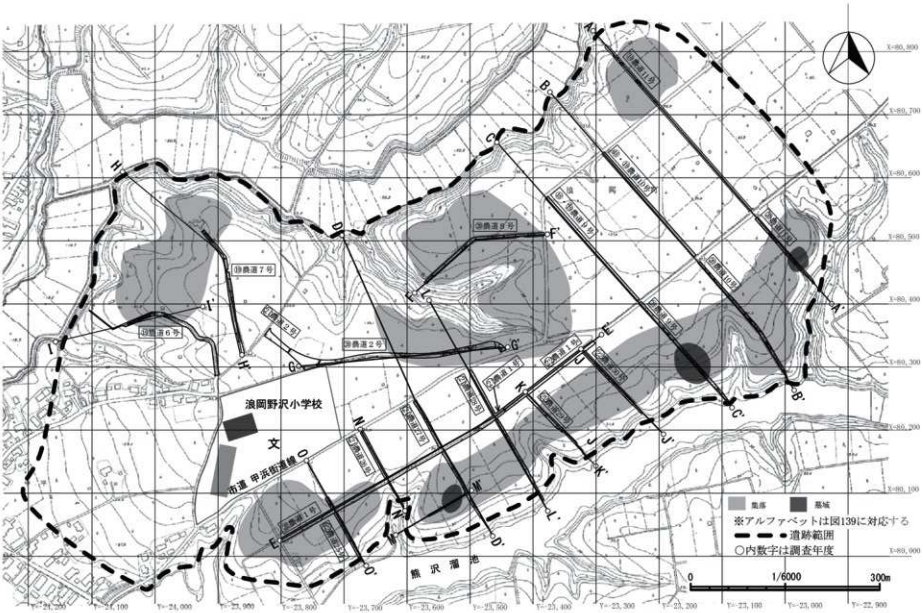

浪岡野沢小学校
浪岡野沢1号
浪岡野沢2号
浪岡野沢3号
浪岡野沢4号
浪岡野沢5号
浪岡野沢6号
浪岡野沢7号
浪岡野沢8号
浪岡野沢9号
浪岡野沢10号
浪岡野沢11号
浪岡野沢12号
浪岡野沢13号
浪岡野沢14号
浪岡野沢15号
浪岡野沢16号
浪岡野沢17号
浪岡野沢18号
浪岡野沢19号
浪岡野沢20号
浪岡野沢21号
浪岡野沢22号
浪岡野沢23号
浪岡野沢24号
浪岡野沢25号
浪岡野沢26号
浪岡野沢27号
浪岡野沢28号
浪岡野沢29号
浪岡野沢30号
浪岡野沢31号
浪岡野沢32号
浪岡野沢33号
浪岡野沢34号
浪岡野沢35号
浪岡野沢36号
浪岡野沢37号
浪岡野沢38号
浪岡野沢39号
浪岡野沢40号

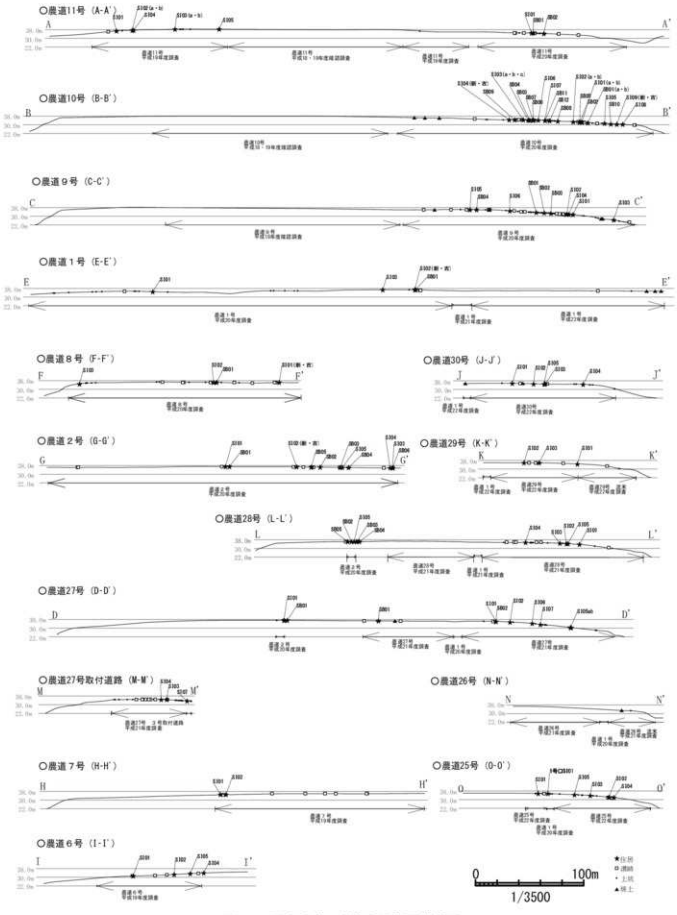


図139　平安時代の遺構占地状況横断図

第２節　平安時代の建物等の変遷について

中平遺跡の４ヶ年の調査では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが組み合わされる建物跡が30棟、単独の竪穴住居跡が47軒、合計77棟分の建物跡等が検出され、これとは別に外周溝と思われる溝跡も７条検出されている（表45・49）。第１節でも述べたように、平安時代の建物跡等は巨視的にみればある程度のまとまりがあるものの建物同士の重複は少なく、散在する傾向が強い。建物跡等は建て替え（拡張・改築を含む）されるものが13軒・14例あり、時期変遷を考える上で重要である。

１　火山灰との前後関係

中平遺跡では平安時代の火山灰としてTo-aとB-Tmが検出されていて、建物跡等でこれら火山灰との時期的前後関係が客観的につかめる建物跡等を表45と図141～143にまとめた。その事例として、火山灰が住居覆土に堆積するもの、外周溝覆土に堆積するもの、火山灰が堆積する他遺構と重複関係にあって間接的に前後関係がつかめるもの、などがある。また、前後関係や時間差を考える際、下記の項目に留意して分析していくこととした。

(1) 自然堆積の場合、住居の覆土に火山灰が堆積しているものは、床面に火山灰が近ければ近いほど火山灰降下直前に廃絶されたものといえる。

(2) 埋め戻されたものや焼失家屋の場合、短期間で覆土中位程度まで埋め戻されることになり、火山灰の検出高（床面もしくは底面からの高さ）がそのまま時間の経過には結びつかない。

(3) 外周溝は掘られて上部を開口させることによって溝としての機能が開始されることから、火山灰が底面に近ければ近いほど火山灰降下直前に使用開始されたものということができる。

(4) 外周溝は使用されている間も埋没過程は進行している。ある程度埋まった状態でも使用されて（機能して）いた可能性が高い。

(5) 建物跡等で火山灰が検出されていないものについては、以下の例が考えられる。

①火山灰が降下する前に自然堆積で埋まりきってしまった場合。→廃絶されてから降下までに相当の時間差がある。

②自然堆積が進んだ段階で火山灰が降下したが、表面を後世の削平等によって剥ぎ取られ、調査で検出できない場合。→廃絶されてから降下までにある程度の時間差がある。

③火山灰が降下する前に人為的に埋め戻された場合。

→降下前に廃絶されたが、どれくらいの時間差があるか不明（降下直前の可能性もある。）。

④火山灰が降下した後に建物等を構築した場合。

⑤火山灰が降下した後に建物等を廃絶した場合。

以上の事項に留意しながら火山灰との前後関係がわかる建物等を時期ごとに振り分けたところ、下記及び図141～143に示したとおり、灰１期～灰４期までの４つの時期に区分できるものと考えた。なおここで記載する用語等については、表45下部にその要領を示してある。

灰１期－火山灰が検出されていないが、火山灰が降下するまでに相当の期間が想定されるもの。

農道９号４竪穴・６竪穴、農道27号３竪穴の３軒で、重複関係によって廃絶から火山灰降下まで相当の期間が経過している。地山をしっかりと深く掘り込んで住居・床面を構築しており、柱穴は検出されていない。

灰２期－火山灰が住居覆土上位から中位に堆積しているもので、火山灰が降下する前の時期に廃絶されたもの。

10軒あり、しっかりと深く掘り込んだ住居４軒、やや深く掘り込んだ程度で床面を作る住居４軒、遺構確認面レベルで床面を作る浅い住居１軒、と混在している。壁溝はないもの２軒、あるものが７軒で、壁溝があるものが増える。柱穴はほとんど見あたらず、壁溝があるものでは数基程度柱穴が見つかる場合もあるが、明確な主柱穴とはならないようである。この時期に掘立柱建物跡とセットになる建物跡（農道27号２建物）が出現するが、柱穴が不十分であることと、竪穴覆土下位が埋め戻されている可能性があることから、次の灰３期により近い時期である可能性が高い。

灰３期－火山灰が住居覆土下位に堆積しているものや、焼失住居及び埋め戻された土層上位に火山灰が堆積しているもの、すなわち火山灰が降下する直前に廃絶されたもの。

９軒あり、しっかりと深く掘り込んだ住居７軒、やや深く掘り込んだ程度で床面を作る住居２軒がある。壁溝はないものが３軒、あるものが６軒で、壁溝のあるものが多い。柱穴は、壁溝がないものには灰２期と同様ほとんど存在しないが、壁溝があるものでは隅柱・壁柱が用いられ、明確な内柱（農道29号１竪穴（新））も出現する。そしてこの時期に掘立柱建物跡がセットになる建物が定着するようである。農道10号２建物（図142）は、灰２期では単独の竪穴住居であるが、建て替えた際（灰３期）に、掘立柱建物も増築したものと思われる。また農道２号２建物（古）にみられる小規模な外周溝は本期に属するが、次の灰４期には大きな規模の外周溝へと造り替えている（図143）。

灰４期－火山灰が外周溝に堆積しており、住居覆土には堆積していないもの。つまり火山灰降下時に使用されていた可能性があるもの。

竪穴住居の掘り込みは浅いものが多くなって掘り方のみ検出される例（農道９号５建物）もある。壁溝を有するものが多く、主柱穴は内柱のものが多くなる。

灰４期で最も特徴的なのが、竪穴住居に加えて掘立柱建物跡・外周溝がセットになるものが主体となることである。農道９号５建物、農道11号１建物、農道２号２建物（新）は、いずれも竪穴住居部分に火山灰は検出されておらず、外周溝にのみ検出されている。すでに述べたように外周溝は使用され（機能し）始めた時点で埋没が進行すると考えられ、外周溝下位部分が埋まった状態で使用されていた可能性がある。言い換えれば、外周溝覆土中位から上位に火山灰が堆積していたとしても、竪穴住居部分に上屋があれば竪穴住居覆土に火山灰は堆積しないで外周溝に流入するものと考えられ、火山灰降下時に居住（使用）されていた可能性が高い。

また農道10号６建物では覆土中位以下は埋め戻されていて、それに混入するようにブロック状の火山灰が検出されていることから、上屋に降下した火山灰などがブロック状に混入した状態で埋め戻されたことが考えられる。この建物跡は、掘り方が長方形をなす内柱タイプの明確な主柱穴が検出されていて柱に板材を使用した可能性がある。

２　住居の建て替え事例

住居の建て替えは、以下のとおり13軒において14例認められている。

農道１号－２号建物（古・新）　農道２号－２号建物（古・新）　農道８号－１号建物（古・新）
農道10号－１号建物（古・新）、＊２号建物（古・新）、３号建物（古・中・新）、９号竪穴（古・新）、４号建物（新）

表45　火山灰との前後関係がある建物・竪穴住居一覧表

火山灰からみた時期	検出時期	竪穴の部別	調査区	遺構	建物・竪穴住居名	建物の構成				竪穴住居の構造								火山灰の堆積状況					備考
						竪穴住居跡	掘立柱建物跡	外周溝	その他	カマド	柱穴			壁溝		張り込み		火山灰なし（降下前）	Toa	B-Tm	火山灰なし（降下後）	埋没状況（埋め戻し・廃棄など）	
										方向	内径	隅柱	壁柱	なし	なし	あり	深い	中や深い	浅い				
16.1世	1期	深A群	20	9号	第4号竪穴住居跡	SI04	–	–	–	?	–	–	–	なし	なし	–	深い	–	–	–	–	埋め戻し	Bs-Tmが堆積する分3層より古い
16.1世	1期	深A群	20	9号	第6号竪穴住居跡	SI06	–	–	–	?	–	–	–	?	なし	–	深い	–	–	–	–	埋め戻し	Bs-Tmが堆積する分16層より古い
16.1世	1期	深A群	21	27号	第3号竪穴住居跡	SI03	?	–	–	南東?	–	–	–	なし	なし	–	深い	–	–	降下前	–	下位は埋め戻し	重複する SI03に火山灰堆積
16.2世	2期	深A群	20	9号	第5号竪穴住居跡	SI05	–	–	–	N-132°-E	–	–	隅柱?	壁柱?	–	なし	深い	–	–	–	–	上位自然 下位埋め戻し?	C14年代では9世紀中葉～10世紀後葉
16.2世	2期	深B群	21	27号	第2号建物跡	SI02	SB04	–	–	N-150°-E	–	–	–	なし	–	あり	深い	–	–	–	?	上位 下位埋め戻し?	
16.2世	2期	やや深B群	21	27号	第8号竪穴住居跡	SI07	–	–	–	?	?	–	–	–	–	あり	–	やや深い	–	–	–	自然	
16.2世	2期	やや深B群	20	9号	第1号竪穴住居跡	SI01	–	–	–	N-138°-E	–	–	隅柱?	–	–	あり	–	やや深い	–	–	–	中位	焼失、上位自然
16.3世	3期	深A群	21	27号	第6号竪穴住居跡	SI06	–	–	–	N-175°-E	–	–	–	なし	なし	–	深い	–	–	–	–	中～上位	焼失
16.2世	2期	やや深A群	22	29号	第3号竪穴住居跡	SI03	–	–	–	N-140°-E	0	–	–	なし	なし	–	–	やや深い	–	–	–	中位	自然
16.2世	2期	やや深B群	19	6号	第1号竪穴住居跡	SI01	–	–	–	N-110°-E	–	–	隅柱?	–	なし	?	–	やや深い	–	–	–	中位	自然
16.2世	2期	浅B群	19	7号	第1号竪穴住居跡	SI01	–	–	–	?	–	–	–	なし	?	–	あり	–	–	浅い	降下前	–	自然	SD01を介在して重複する SI02に火山灰堆積
16.2世	2期		20	11号	第7号遺構	–	SB07	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	中位	–
16.3世	3期	深A群	20	8号	第3号竪穴住居跡	SI03	–	–	–	?	–	–	–	なし	なし	–	多少深い	–	–	–	下位	下位	自然
16.3世	3期	深A群	21	27号	第4号竪穴住居跡	SI04	?	–	–	南東?	–	–	–	なし	なし	–	深い	–	–	–	–	下位	自然
16.4世	4期	浅B群	20	10号	第6号建物跡	SB06	SB11	SD13、SK12	–	南東?	内径（梁材）	–	–	–	–	一部	深い	–	–	–	中位（下が4層）	中下位埋め戻し	10号了建物より新しい
16.2世	2期	深B群	22	29号	第1号竪穴住居跡（古）	SI01（古）	?	–	–	?	内径?	–	–	–	–	あり	深い	–	–	降下前	–	–	重複する SI01（新）に火山灰堆積
16.3世	3期	深B群	22	29号	第1号竪穴住居跡（新）	SI01（新）	?	–	–	?	内径?	隅柱?	–	–	–	あり	深い	–	–	–	下位	下位	上位自然 下位埋め戻し
16.3世	3期	やや深B群	19	7号	第2号竪穴住居跡	SI02	–	–	–	?	–	–	–	なし	?	–	あり	–	やや深い	–	–	下～中位	下位埋め戻し?
16.3世	3期	浅B群	20	9号	第1号竪穴住居跡	SI01	–	–	–	N-145°-E	–	–	壁柱	–	–	あり	深い	–	–	降下前	下位	下位	自然
16.2世	2期	深B群	20	10号	第2号a建物跡（古）	SB02a	SB02	–	SK19	?	内径（梁材）	–	壁柱（梁材）	–	–	あり	深い	–	–	降下前	–	–	–
16.3世	3期	深B群	20	10号	第2号b建物跡（新）	SB02b				?	内径（梁材）	–	壁柱（梁材）	–	–	あり	深い	–	–	–	–	上位	埋め戻し
16.3世	3期	深B群	20	10号	第8号竪穴住居跡	SI08	–	–	SK15	N-139°-E	–	–	–	なし	–	あり	深い	–	–	–	–	確認面	埋め戻し直後に火山灰降下
16.4世	4期	浅A群	20	9号	第5号建物跡	SB05	SB04	SD05	–	掘り方のみ	内径?	–	–	–	なし	?	–	–	–	（掘り方のみ）	–	外周溝の中～上位	本明（掘り方のみ）
16.3世	3期	–	20	10号	第11号遺跡	–	–	SD11	?	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	外周溝上位	外周溝自然
16.4世	4期	浅B群	20	11号	第1号建物跡	SB01	SB01	SD03	–	南東?	–	–	–	なし	–	あり	–	–	浅い	–	–	外周溝～上位	本明（新平）
16.3世	3期	やや深B群	20	2号	第2号建物跡（古）	SB02（古）	–	SD02b	–	?	–	–	–	なし	–	あり	–	やや深い	–	降下前	–	–	–
16.4世	4期	浅B群	20	2号	第2号建物跡（新）	SB02（新）	–	SD02a	–	?	内径?	–	–	–	–	あり	–	–	浅い	–	–	外周溝の中位	自然
16.4世	4期	–	20	11号	第4号遺構	–	–	SD04	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	外周溝下位	–

<表45注>
○建て替えがあるものは、この表中では時期を区別したが、集成図では最終期の形態で掲載した。
○「建物の構成」　組み合わされて建物を構成するものを記載。住居内土坑等小規模施設は掲愛。
○表中の「－」は「存在しない」もしくは「該当なし」、「?」は「存在不明（調査区域外等に存在する可能性あり）」という意。
○竪穴住居の構造として「カマド」「柱穴」「壁溝」「張り込み」を記載。
・「カマド」　カマドが確存するものはその軸方向を記載し、「地下式カマド」のみ「地下式」と記載し、それ以外はすべて「平地下式カマド」である。
「?」は調査区外に高い可能性が高いもの。
・「柱穴」　壁から離れて住居内部に柱穴があるものを「内柱」、住居隅に柱穴があるものを「隅柱」、住居壁で隅柱と隅柱の間に柱穴があるものを「壁柱」。
柱穴が検出されなかったものは「なし」とした（図140）。それぞれ不確定なものには「?」を付した。
・「壁溝」　「なし」「あり」で区別した。
・「張り込み」遺構確認面（廃棄層＋盲層、以下同じ）より概ね10cm以上しっかり掘り込んで床面を作っているものを「深」。遺構確認面から概ね10cm以内の浅い面で床面を作っているものを「やや深」。概ね遺構確認レベルで床面が検出されているものを「浅」とした。
上掘的要素を多分に含んでいることをお断りしておく。
○「火山灰の堆積状況」
・平安時代に降下したToaとB-Tmの2つの火山灰が竪穴住居に堆積している状況を記し。外周溝に堆積しているものは「外周溝」を付した。
・火山灰が検出されていないものは「降下前」・「降下後」双方想定されるが、遺構の重複関係から判別したものもある。
・埋没時（廃棄）に埋め戻した痕跡があった場合、堆積土に土壌・炭化物等が投入されたため埋没が急激に進んだ事となる。埋め戻された直後に火山灰が降下しても堆積土上部に火山灰が検出されることとなるため、
自然堆積、埋め戻し、焼失など埋没速度に影響を及ぼす恐れがある事項などを「埋没状況」に記した。
・火山灰が検出されなかったものは「なし」。報告書に火山灰有無の記載がないものは「不明」としている。
○「火山灰」　Toaは西暦915年とし、ここでは10世紀前葉（921～940年）とした。B-Tmは西暦926年、936年、937～938年、939年、947年、969年、1039年と諸説があるが、ここでは10世紀中葉（941～960年）を火山灰降下時期とした。なお本表での各世紀の細分は「初頭」・「前葉」・「中葉」・「後葉」・「末葉」の5期区分（20年単位）としたが、「前半」・「後半」も使用している。
○表49も上記要領で作成している。

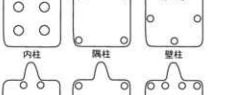


図140　柱穴配置模式図

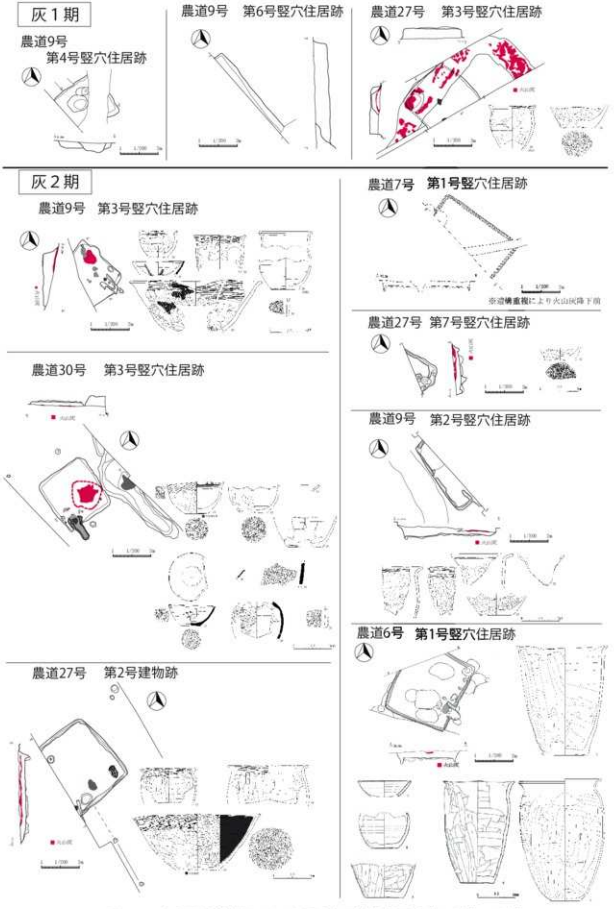


図141　火山灰堆積状況からみた竪穴住居等集成図（1）灰1期・灰2期

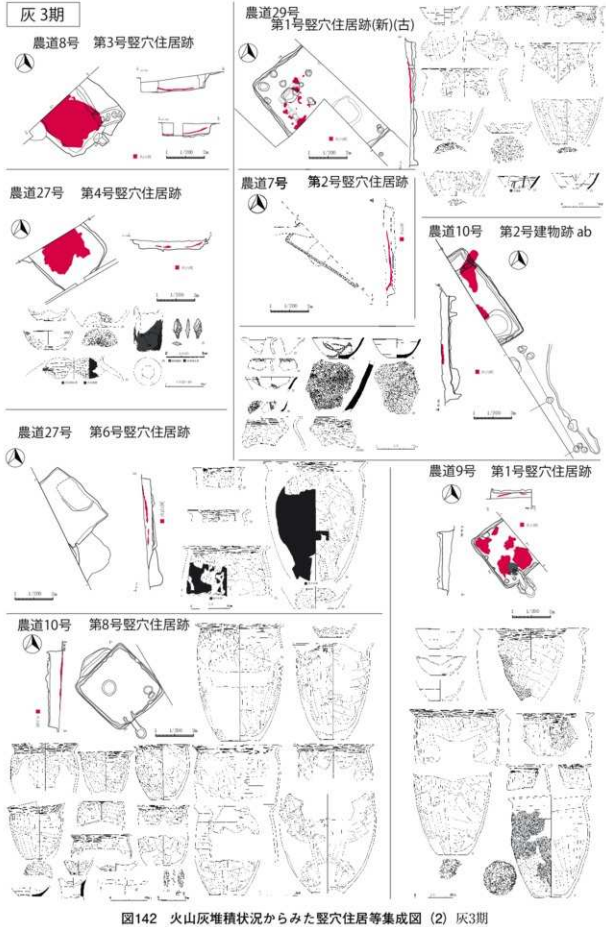


図142 火山灰堆積状況からみた竪穴住居等集成図 (2) 灰3期

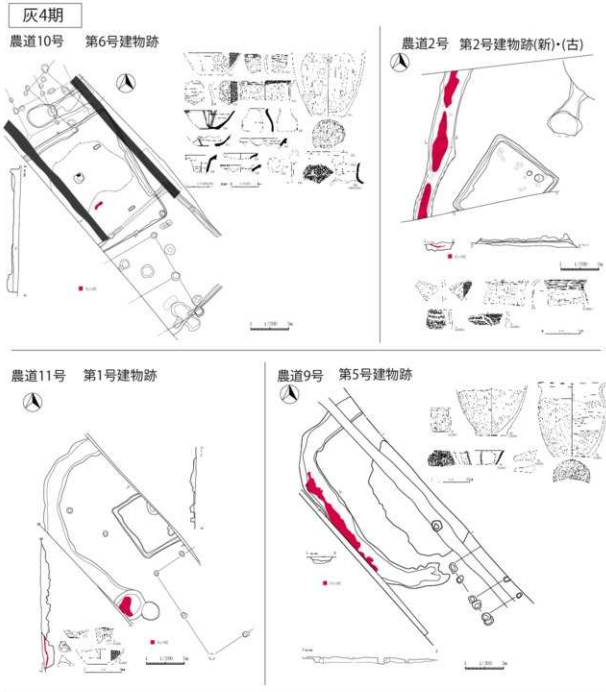


図143　火山灰堆積状況からみた竪穴住居等集成図（3） 灰4期

農道11号－１号竪穴（古・新）、３号竪穴（古・新）、５号竪穴（古・新）、２号竪穴（古・新）
農道29号－＊１号竪穴（古・新）　　＊…火山灰との前後関係がわかるもの

これら建て替えの特徴として、床面積は狭いものから広いものへと、そしてしっかりした深い掘り込みからやや深い掘り込みへと造り替えられていることがいえる。床面積の多寡は、居住・使用する目的、用途、必要面積に左右されると見込まれるが、掘り込みの深さに関わる居住空間の大きさは上屋の構造・規格等で調整することが可能と推測できることから、労力の増減を伴う掘り込みの深浅は時期的推移を反映している可能性があると考えられる。

3　建物・竪穴住居の分類

1で火山灰との前後関係のわかる建物・竪穴住居の時期的変遷、2で建て替え時に竪穴を浅いものへと改築したことを把握した。これらのことから竪穴住居の構造は、①掘り込みの深さ、②壁溝の有無、の2点が時期的遷移によって影響を受ける要素ではないかと仮定できる。そこで、掘立柱建物跡や外周溝の有無にかかわらず竪穴住居部分のみに着眼して、以下のように竪穴住居を分類した。

①掘り込みの深さ

遺構確認面（漸移層＝Ⅳ層、以下同じ）より概ね10cm以上しっかり掘り込んで床面を作っているものを「深」、遺構確認面から概ね10cm以内の浅い面で床面を作っているものを「やや深」、概ね遺構確認面レベルで床面が検出されているものを「浅」とした。主観的要素を多分に含んでいることをお断りしておく。

表46　竪穴住居の群別属性表

掘り込み＼壁溝	なし	あり
深い	深A群	深B群
やや深い	やや深A群	やや深B群
浅い	浅A群	浅B群

②壁溝の有無

「なし」「あり」で区別し、壁溝のないものを「A」、壁溝のあるものを「B」とした。

この2点をもとに表46のように群別し、火山灰との前後関係で捉えた灰1期から灰4期までの時期区分がつかめているものを表45及び図141～143にまとめた。

さらに各住居群の時期別消長を表47にまとめてみたところ、古い時期では深く掘り込まれる竪穴住居が多いが、新しくなるにつれて掘り込みが浅くなるということが見て取れる。また、同じ深さでも壁溝のある竪穴住居の方がより後の時期まで使われることもわかる。ただし灰2期にある浅B群の農道7号1竪穴は、遺構の重複関係によって灰2期としたものだが、灰3期に近いものと考えられる。

表47　火山灰との前後関係が分かる建物・竪穴住居の時期区分

火山灰を基にした時期区分	深A群	深B群	やや深A群	やや深B群	浅A群	浅B群	火山灰の降下時期
灰1期	3	－	－	－	－	－	
灰2期	1	4	1	3	－	1	
灰3期	3	4	－	2	－	－	To-a 降下？
灰4期	－	1	－	－	1	2	B-Tm 降下？

4　火山灰との前後関係が不明な建物・住居の分類

中平遺跡で検出された建物・竪穴住居のうち、火山灰との前後関係がわからないものについても、3の分類基準に則って分類・集成し、表49と図144～151に示した。なお出土遺物のないものなど、図版には掲載していないものがあることをお断りしておく。各住居群の特徴等は以下のとおりである。

深A群　しっかりとした深い掘り込みを有し、壁溝のない竪穴住居。12棟あるが大半の竪穴住居には柱穴がなく、掘立柱建物とセットになるものは農道27号1建物の1棟だけである。また、廃絶時に焼失しているものや埋め戻されているものが多い。

深B群　しっかりとした深い掘り込みを有し、壁溝のある竪穴住居。棟数が最も多く17棟あり、掘立柱建物とセットになるもの、もしくは掘立柱建物・外周溝とセットになるものがほとんどである。

単独の竪穴住居も調査区外に掘立柱建物が存在する可能性もある。

柱穴は、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものが主体となっており、柱穴がないものは少数である。主柱穴には長方形の掘り方を有するものがあって、板材を用いていたと思われるものが5棟ある。また、廃絶時に深A群は覆土上位まで埋め戻されているものが多いのに対し、本群では中位以下まで埋め戻し、上位が自然堆積しているものが多い。焼失しているもの、廃絶直後から自然に堆積しているものも少数ある。

やや深A群　やや深い掘り込みを有し、壁溝のない竪穴住居。本群は3棟だけである。いずれも柱穴は見つかっておらず、単独の竪穴住居である。廃絶時は埋め戻されている可能性が高い。

やや深B群　やや深い掘り込みを有し、壁溝のある竪穴住居。柱穴は、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものが多いが、見つからない竪穴住居もある。建物構成は、竪穴住居単独のもの、ピット列を伴うもの、掘立柱建物・外周溝とセットになるものがある。廃絶時は、焼失及び埋め戻されるものと、自然堆積するものとがほぼ半数である。建て替えが認められる農道1号2建物（図150）は、古い時期は「やや深A群」の単独の竪穴住居であるが、建て替えによって掘立柱建物・外周溝を伴う建物となり、それに加えて土坑・排水溝も伴ったものに改築した可能性が高い。

浅A群　浅い掘り込みで床面が遺構確認面付近レベルにあるもので、壁溝のない竪穴住居。柱穴は、ないものと隅柱・壁柱の組み合わされるもので構成され、内柱のあるものは1例のみである。建物構成は、単独の竪穴住居、掘立柱建物・外周溝とのセットがあるものの、掘立柱建物とのセットはない。廃絶時は、掘り込みが浅いため不明なものも多いが、埋め戻しは少なく放置されて自然に堆積していくものが多い。

浅B群　浅い掘り込みで床面が遺構確認面付近レベルにあるもので、壁溝のある竪穴住居。4棟だけで、柱穴のないものと内柱・隅柱の組み合わせるものとがあり、壁柱を使うものはない。掘立柱建物・外周溝は伴わず、単独の竪穴住居のみである。廃絶時は放置され自然堆積するものがほとんどである。

5　中平遺跡の建物変遷と時期

1において火山灰との前後関係が把握できる遺構について灰1期～灰4期に区分したが、中平遺跡では火山灰降下後の遺構も存在するとみられる。したがって中平遺跡の時期区分としては灰1期～灰4期をそれぞれ第1期～第4期とし、火山灰降下後を第5期として考えることとする。

4で群別した各住居群が、それぞれある程度の時間幅をもっていると考え、3で導き出した各住居群の消長にもとづいて、中平遺跡で検出されたすべての住居を第1期～第5期に振り分け、群別消長を表48にまとめた。また各時期の特徴を以下にまとめるが、第1期～第4期の特徴はすでに述べた灰1期～灰4期の特徴とほぼ重複するため、ここでは概略のみ述べることとする。

第1期　地山をしっかりと掘り込んで住居・床面を構築するが柱穴のないもので、6棟ある。廃絶から火山灰降下まで相当の期間を有する時期（9世紀前葉？）と思われる。

第2期　しっかりと地山を掘り込んだ住居11棟、やや掘り込んだ程度で床面を作る住居7棟、遺構確認面レベルで床面を作る浅い住居3軒と混在する。壁溝があるものが増える。柱穴はほとんど見あたらないが、壁溝があるものでは数基程度柱穴が作られるものもある。この時期に掘立柱建物跡とセットになる建物跡が出現しはじめる。時期的には火山灰降下まで一定の期間を有する時期（9世紀中葉？）と思われる。

第３期　29棟あり、しっかりと地山を掘り込んだ住居20棟、やや掘り込んだ程度で床面を作る住居８棟、浅い住居１棟がある。壁溝はないもの10軒、あるもの19軒で、壁溝のあるものが凌駕する。壁溝がないものには柱穴はあまり用いられないが、壁溝があるものでは隅柱・壁柱が用いられ、明確な内柱も出現する。そしてこの時期に掘立柱建物跡とセットになる建物が定着し、初源的な外周溝が作られる。当期には該当する棟数が多く構造にも多様性がみられることから、９世紀後葉頃からTo-aが降下する前後の時期（９世紀後葉～10世紀初頭？）までの広い時間幅を有しているものと考えられる。したがって本期は単独の竪穴住居を主体とする前半期と掘立柱建物を付属する後半期に大別できる可能性があって、終末期にはTo-aが降下して初源的な外周溝を付属する、という変遷が想定できる。

第４期　しっかり深く掘り込むもの７棟、やや深く掘り込むもの２棟、浅い掘り込みのもの５棟で、浅いものが増え、掘り方のみ検出される例もある。壁溝を有するものが多く、主柱穴は内柱タイプが多くなり、主柱として板材を用いるものがある。最も特徴的なのが、竪穴住居に加えて掘立柱建物・外周溝がセットになるものが主体となることである。竪穴住居部分に火山灰は検出されておらず、外周溝にのみ検出されていることから、火山灰降下時に居住（使用）されていた可能性が高い。したがって本期は、B-Tmが降下する時期（10世紀前葉～中葉？）と思われる。

第５期　掘り込みがやや深いもの１棟、掘り込みが浅いものが６棟で、浅A群に分類された建物・竪穴住居が中心になると思われ、第４期に引き続き竪穴住居・掘立柱建物・外周溝のセットが継続して本期でも使用されるが、単独の竪穴住居も再び造られる。壁溝のないものには壁柱が用いられ、壁溝のあるものは柱穴がないものと、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものとがある。本期はB-Tm降下以後の時期（10世紀後葉？）と思われる。

集落としてはTo-a降下前の第３期がピークで、B-Tmが降下した後、しばらく集落は維持されるものの、10世紀後葉には消滅するものと考えられる。

第３期の小規模な外周溝から第４期の大規模な外周溝へと造り替えている例が農道２号２建物（古・新）及び農道10号１建物（ａ・ｂ）にみられ、このことは火山灰の降下と同調するものと考えられる。To-aの降下時では小規模な外周溝で十分な効果（排水・防水等？）を得られていたが、大規模な噴火であるB-Tmの降下によって生じる天候不順には不十分であったため、第４期のB-Tm降下時に排水・防水効果を高めるため大規模な外周溝に造り替えたものと推測される。

表48　中平遺跡で検出されたすべての建物・竪穴住居の時期分類

中平遺跡での時期区分	火山灰を基にした時期区分	深A群	深B群	やや深A群	やや深B群	浅A群	浅B群	火山灰の降下
1期	灰1期	6	－	－	－	－	－	
2期	灰2期	5	6	2	5	－	3	
3期	灰3期	8	12	2	6	1	－	To-a 降下？
4期	灰4期	－	7	－	2	2	3	B-Tm 降下？
5期	－	－	－	－	1	5	1	

表49　火山灰との前後関係が不明な建物・竪穴住居一覧表

火山灰からみた時期	確定時期	竪穴の時期	建物の番号	遺構名	建物・竪穴住居名	建物の構成				竪穴住居の構造							掘り込み		火山灰なし（除了後）	火山灰なし（除了後）	火山灰の堆積状況			堆積状況（既存の人・概ねなど）	備考
						竪穴住居	掘立柱建物	馬場	その他	カマド方向	柱穴 内側	柱穴 隅柱	柱穴 壁柱	柱穴 なし	壁溝 なし	壁溝 あり	深い	やや深い	浅い		To-a	B-Tm			
－	1期	深入部	22	25 早	第5号竪穴住居跡	SI05	－	－	－	鬼子式 N-141－E	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	上部が ない	－	－	－	埋め戻し	
－	1期	深入部	22	30 早	第5号竪穴住居跡	SI05	－	－	－	?	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	下部が ない	－	－	－	埋め戻し	30早は誤2号説
－	2期	深入部	19	31 早	第4号竪穴住居跡	SI04	－	－	－	N-175－E	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	下部が ない	－	－	－	埋め戻し	
－	2期	深入部	21	30 早	第5号竪穴住居跡	SI05	－	－	－	?	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然？	
－	1期	深入部	20	30 早	第4号竪穴住居跡（古）	SI09（古）	－	－	－	?	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	ウイグルマッチング法	
－	3期	深入部	20	30 早	第4号竪穴住居跡（新）	SI09（新）	－	－	－	N-110－E	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	埋め・埋め戻し	ウイグルマッチング法で9世紀前葉
－	2期	深入部	21	29 早	第3号建物跡	SI01	SB03	－	－	N-130－E	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し	
－	3期	深入部	22	30 早	第2号竪穴住居跡	SI02	－	－	－	N-175－E	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し	
－	3期	深入部	21	30 早	第3号建物跡	SI03	－	－	－	N-42－E	－	鬼柱	－	－	－	－	深い	－	－	上部が ない？	－	－	－	埋め戻し	
－	3期	深入部	21	30 早	第1号竪穴住居跡	SI01	－	－	－	N-140－E	－	鬼柱	－	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	埋め	
－	3期	深入部	22	30 早	第2号竪穴住居跡	SI02	－	－	－	N-120－E	内柱	鬼柱	－	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し	
－	3期	深入部	22	30 早	第3号建物跡	SI03	SB03	－	－	N-144－E	－	－	－	なし？	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	自然	
－	2期	深入部	22	30 早	第4号竪穴住居跡	SI04	－	－	－	N-140－E	－	－	－	なし	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し	
－	2期	深入部	20	30 早	第4号竪穴住居跡（古）	SI04（古）	なし？	－	－	掘り方のみ	－	－	－	－	－	－	深い	－	－	－	－	－	－	－	
－	3期	深入部	20	30 早	第4号竪穴住居跡（新）	SI04（新）	SB09	－	SK01-11	N-138－E	内柱	－	壁柱？	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	
－	3期	深入部	20	30 早	第5号建物跡	SI05	SB10	－	－	N-175－E	内柱	－	壁柱？	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	上・下位自然、中位埋め戻し	
－	3期	深入部	20	30 早	第7号建物跡	SI07	SB12	－	SD11、SK10-17-20、SX01	N-142－E	内柱？	鬼柱	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	10世6建物より古い。SX01のAMS測定13世紀中葉～後半
－	4期	深入部	22	29 早	第3号建物跡	SI03	?	SD04	SK07-08？	?	?	鬼柱	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	
－	3期	深入部	21	30 早	第3号竪穴住居跡	SI03	－	－	－	?	内柱？	－	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し	
－	3期	深入部	20	30 早	第1号ょ建物跡（古）	SI01a	SB01a	SD06a	SK05-11	?	内柱（板材）	鬼柱？	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	－	
－	4期	深入部	20	30 早	第1号ょ建物跡（新）	SI01b	SB01b	SD06b	SK06	N-118－E	内柱（板材）	鬼柱	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	4期	深入部	20	2 早	第5号建物跡	SI05	SB04	SD04a・b	－	N-125－E	内柱	鬼柱	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め住居	宮花村はやすずキッチン学説で10世紀前葉、宮花（キは AMS で9世紀後半～10世紀前葉
－	4期	深入部	20	2 早	第6号建物跡	SI04	SB06	SD08	－	?	?	鬼柱	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め住居	2早3期で古い。C14年代は9世紀末～10世紀前葉（古木効果？）
－	3期	深入部	20	8 早	第1号建物跡（古）	SI01（古）	?	SD01？	－	?	内柱	－	－	なし	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	－	C14年代では、住居跡埋積が9世紀末～10世紀前葉。外周溝最化種子が9世紀末～10世紀前葉
－	4期	深入部	20	8 早	第1号建物跡（新）	SI01（新）	?	SD01	SD05	?	内柱（板材？）	－	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め・埋め戻し	C14年代では、住居跡埋積が9世紀末～10世紀前葉。外周溝最化種子が9世紀末～10世紀前葉
－	3期	中々原入部	21	28 早	第4号竪穴住居跡	SI04	－	－	－	?	－	－	－	なし？	なし	－	－	中々深い	－	－	－	－	－	埋め戻し？	
－	2期	深入部	21	29 早	第3号竪穴住居跡（古）	SI03a	－	－	－	?	－	－	－	なし	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	－	
－	3期	中々原入部	21	29 早	第3号竪穴住居跡（新）	SI03a	－	－	－	?	－	－	－	なし	－	あり	－	中々深い	－	－	－	－	－	埋め戻し	2早4期より古い？
－	2期	中々原入部	20	1 早	第5号竪穴住居跡	SI05	?	－	－	?	－	－	－	なし	－	あり	－	中々深い	－	－	－	－	－	埋め戻し	C14年代では9世紀後葉～10世紀前葉
－	3期	中々原入部	20	1 早	第6号竪穴住居跡	SI06	?	－	－	?	内柱	鬼柱	－	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	2期	深入部	19	31 早	第5ょ号竪穴住居跡（古）	SI02b	－	－	馬道	?	内柱	－	－	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	埋め戻し、火山灰なし	
－	3期	中々原入部	19	31 早	第5ょ号竪穴住居跡（新）	SI02a	－	－	－	?	内柱	鬼柱？	－	－	－	あり	－	中々深い	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	2期	中々原入部	19	6 早	第2ょ号建物跡（古）	SI02	C-118	－	－	N-100－E	－	－	－	なし	－	あり	－	中々深い	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	3期	深入部	20	10 早	第5ょ号建物跡（古）	SI05a	SB03	SD10	－	?	内柱	－	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	－	10世6建物より新しい
－	4期	深入部	20	10 早	第5ょ号建物跡（新）	SI05b	SB04	SD08	SK13	?	内柱	－	壁柱	－	－	あり	深い	－	－	－	－	－	－	－	10世6建物より新しい
－	5期	中々原新部	20	10 早	第3号ょ建物跡（新）	SI03 c	SB04	SD07-09	－	N-130－E	内柱	－	壁柱	－	－	あり	中々深い	－	－	－	－	－	－	埋め	10世6建物より新しい
－	3期	中々原入部	20	1 早	第2号建物跡（古）	SI02（古）	SB01	SD02	SD03	N-146－E	－	鬼柱	壁柱	－	－	あり	中々深い	－	－	－	－	－	－	自然	
－	4期	中々原新部	20	1 早	第2号建物跡（新）	SI02（新）	SB01	SD02	SD03	N-146－E	－	鬼柱	壁柱	－	－	あり	中々深い	－	－	－	－	－	－	自然	
－	5期	中々原新部	20	8 早	第2号建物跡	SI02	SB01	SD06-09	－	南壁	－	－	－	?	－	あり	中々深い	－	－	－	－	－	－	自然	
－	3期	中々原入部	19	31 早	第5号竪穴住居跡	SI05	ビ寸2基	あり	－	N-113－E	鬼柱	鬼柱	－	－	－	あり	中々深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	
－	5期	浅入部	22	29 早	第2号竪穴住居跡	SI02	－	－	－	?	－	－	－	なし？	なし？	－	－	－	掘り方のみ	－	－	－	－	不明（掘り方のみ）	掘り方のみ検出
－	5期	浅入部	20	6 早	第6号建物跡	SI06	SB05	SD03-09	SD10	?	－	－	－	なし	なし？	－	－	－	（壁穴なし）	－	－	－	－	不明（掘出なし）	C14年代ではA世紀後半～9世紀末
－	4期	浅入部	20	6 早	第5号建物跡	SI05	－	－	－	N-116－E	－	－	－	－	－	－	深い	－	－	－	－	－	－	自然	
－	3期	浅入部	22	30 早	第3号建物跡	SI03	－	－	－	?	－	鬼柱	－	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	
－	3期	浅入部	20	21 早	第1号建物跡	SI01	SB01	SD01	－	南壁？	－	鬼柱	壁柱	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	上位自然、下位埋め戻し	
－	3期	浅入部	22	30 早	第2号建物跡	SI02	－	－	－	N-130－W	－	鬼柱	壁柱	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	自然？	
－	3期	浅入部	22	30 早	第3号建物跡	SI03	SB01	－	－	?	内柱？	鬼柱	壁柱	－	なし	－	深い	－	－	－	－	－	－	上位埋め戻し、上位自然	
－	2期	浅入部	19	6 早	第4号竪穴住居跡	SI04	－	－	－	N-111－E	－	－	－	なし	－	あり	－	深い	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	2期	浅入部	19	6 早	第5号竪穴住居跡	SI05	－	－	－	N-115－E	－	－	－	なし	－	あり	－	深い	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	4期	浅入部	19	11 早	第3ょ号竪穴住居跡（古）	SI03b	－	－	－	N-164－E	内柱	鬼柱	－	－	－	あり	－	深い	－	－	－	－	－	自然、火山灰なし	
－	5期	浅入部	19	11 早	第3ょ号竪穴住居跡（新）	SI03a	－	－	－	N-164－E	内柱	鬼柱	－	－	－	あり	－	深い	－	－	－	－	－	－	
－	4期	－	20	11 早	第2号道路	－	－	SD02-SD03	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
－	4期	－	20	11 早	第1号道路	－	－	SD01	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
－	4期	－	22	30 早	第2号道路	－	－	SD02	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	外周溝埋め戻し	30早3期より新しい

<表49注>
○記載要領は表45と同じ。

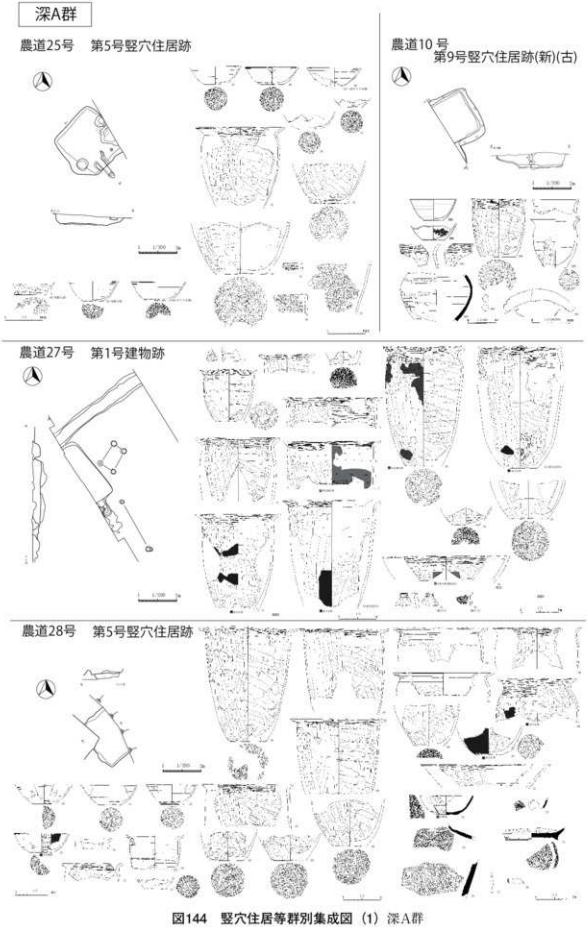


図144　竪穴住居等群別集成図（1）深A群

図145　竪穴住居等群別集成図（2）深A群

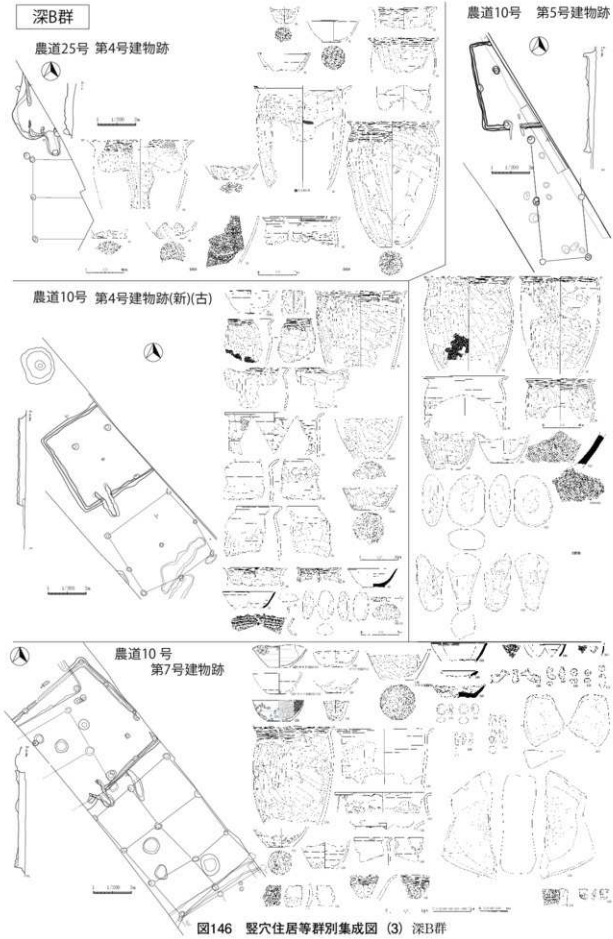


図146 竪穴住居等群別集成図 (3) 深B群

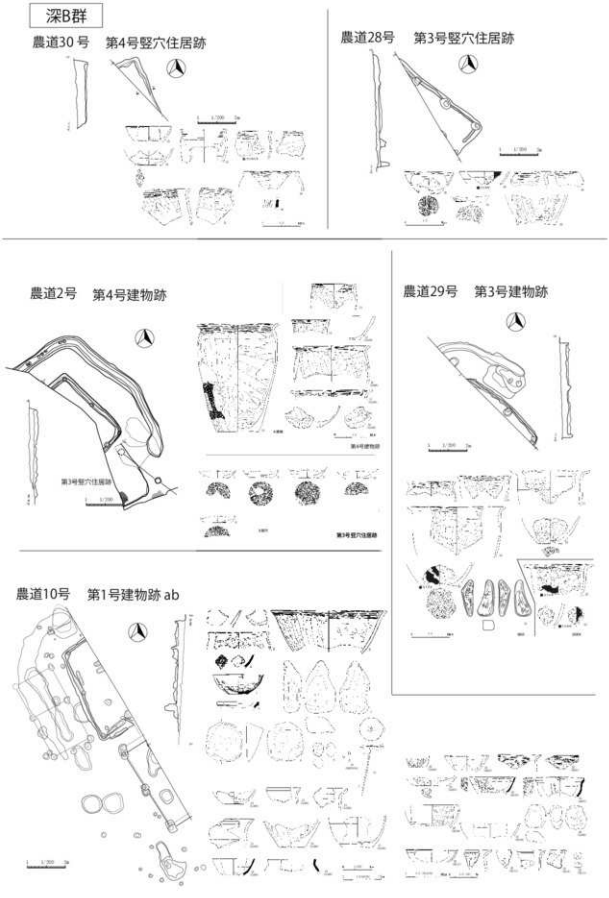


図147　竪穴住居等群別集成図（4）深B群

深B群

農道8号　第1号建物跡(新)(古)

農道2号　第5号建物跡

図148　竪穴住居等群別集成図（5）深B群

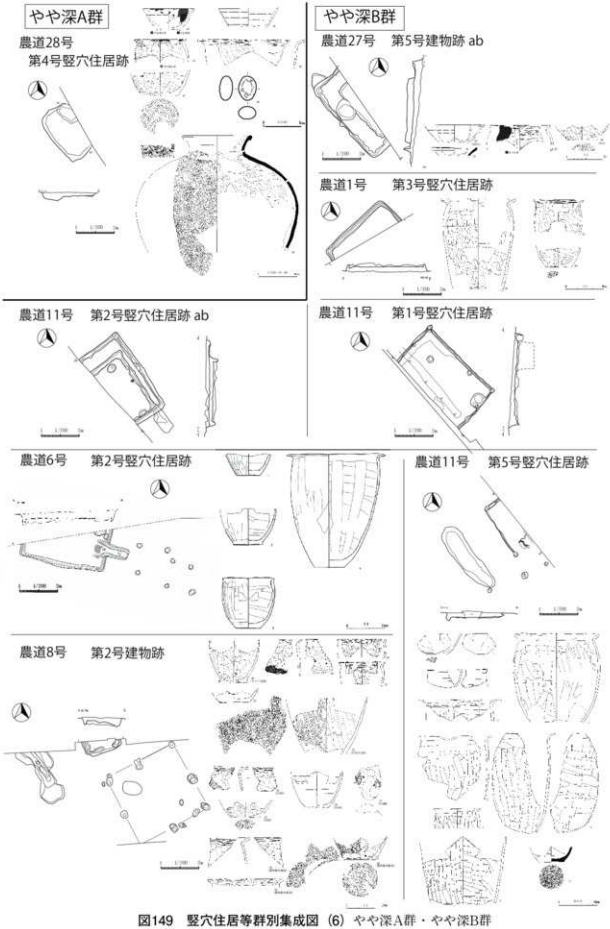
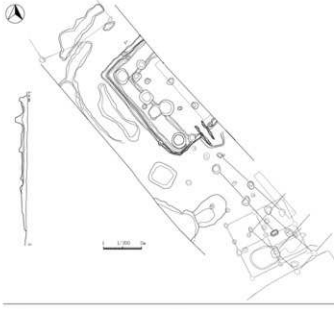
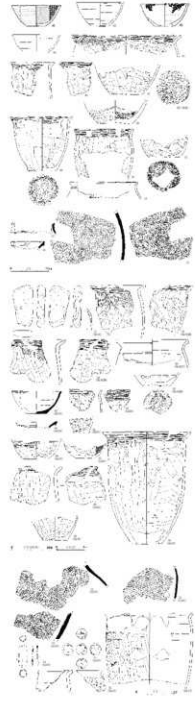


図149　竪穴住居等群別集成図（6）やや深A群・やや深B群

やや深B群

農道10号　第3号竪穴住居跡 ABC





農道1号　第2号竪穴住居跡(新)(古)

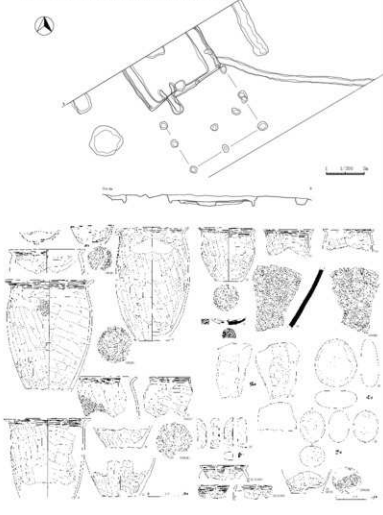


図150　竪穴住居等群別集成図（7）やや深B群

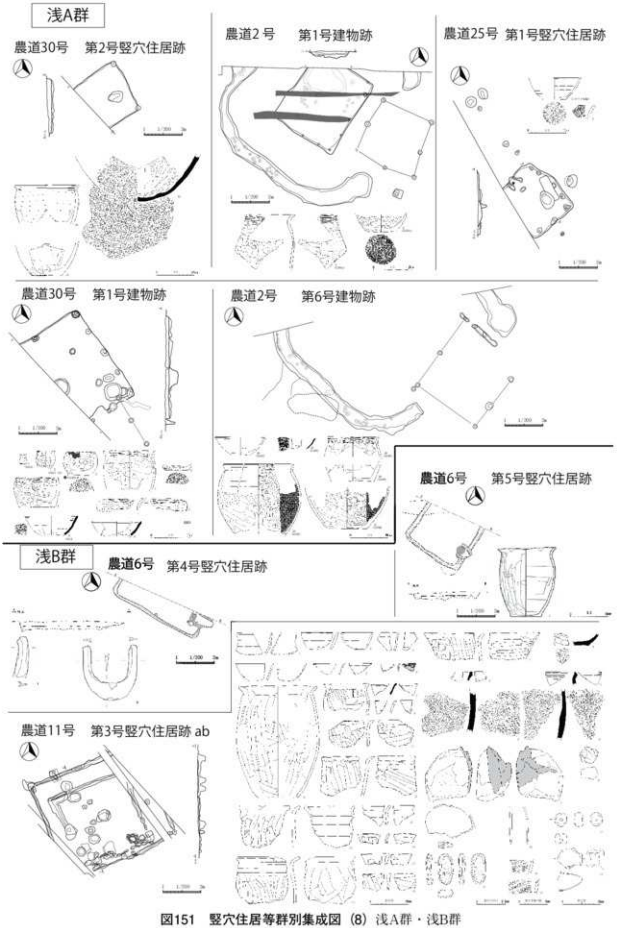


図151 竪穴住居等群別集成図 (8) 浅A群・浅B群

6　建物変遷の問題点と課題

竪穴住居構造に関する火山灰降下時までの大きな流れとしては、掘り込みの深いものから浅いものへ、壁溝のないものからあるものへと移り変わり、To-aが降下する前に掘立柱建物が付属し、火山灰の降下に伴って外周溝がさらに付属するという変遷がたどれ、外周溝は火山灰の降下時期とリンクする可能性が高いということも推測できた。しかし、掘立柱建物が竪穴住居に付属する意味や機能は明らかになっておらず、火山灰降下後の竪穴住居構造も明瞭につかむことができていない。

竪穴住居の柱穴配置は本来であればもっと踏み込んで分類できるはずであるが、幅6ないし8mの調査区では竪穴住居内部を全面調査できることは少なく、限られた一部を調査しているだけである。このことは掘立柱建物やカマドなど付属施設についても同様で、遺構の部分的な精査という制限の中、これ以上は憶測の度合いが増すばかりであることから建物等の構造変遷の模索はここで終える。

出土土器類に関して次節で詳細を述べるが、個々の遺物をみれば時期差は認められるものの、建物・竪穴住居ごとのまとまりとしてみた場合、明瞭な時期差を見出すことができないくらい近接した時間枠で建物・竪穴住居が移り変わったものと思われる。また外周溝から出土した遺物に関しては、溝として機能していた時も廃絶された後も遺構と関係のない時期の遺物が混入することが多く、遺構との同時性を識別・把握した上で検討する必要があったが、ここでは時間的制約からその手順を踏めなかったことが遺物の時期差を見えにくいものにしている要因のひとつである可能性がある。

報告書での事実記載では遺構の形状・重複関係だけでなく遺物を含めて時期判定するため、往々にして遺構の存続期間が広めに想定される場合が多い。またこれまでの多方面からの研究成果によって土器の編年表が編まれており、ここで述べた時期とは齟齬をきたしている可能性がある。青森県内における遺物の絶対年代観は、他県（他地域）における年代観の援用であったり、遺物の形状・特質等を相対的に前後関係で並べたものが多く、絶対的年代観を有している資料は少ない。また生産地と消費地における時期差がどれくらいあるのか、土器の耐用年数がどれくらいあるのか、カマド支脚として使用された土器は器としての使用期間と支脚としての使用期間はどれくらいあるのか、などなど多くの不確定要素を含んでおり、遺構の使用された年代を導き出す場合、よほど良好な資料でなければ事実誤認する可能性が高いと思われる。

平安時代の火山灰降下年代は、十和田ａ火山灰（To-a）が西暦915年、白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）が西暦926年、936年、937～938年、939年、947年、969年、1039年と諸説あって、両火山灰とも降下年代が変わる可能性がある。したがってここでは、降下火山灰との相対的な時期で捉えることに努めた。火山灰の年代観が変わればここで示した時期（絶対年代）も変わることを申し添えておく。

ここでは火山灰の堆積状況をもとに竪穴住居構造の変遷を辿り、それをもとにすべての建物跡等を類型化して帰属時期を想定したものである。出土遺物の時期は加味していないため、遺構と遺物で時期差が生じている可能性があるが、時期差があるものについては遺物の出土状況や遺構の存続期間などさらなる検討が必要であろう。またここでは5期の時期区分を用いて建て替えのある建物等も各期に振り分けたが、時期ごとに一斉に遺構を建て替えるわけではなく、使用期間が短く同一時期に属する建物等が存在する可能性もあり、各住居がそれぞれどれくらいの時間幅をもって存在していたのか、という点も視野に入れる必要があろう。

第３節　建物跡等出土遺物の時期別様相

ここでは第２節で導き出された建物等の時期区分に沿って、各時期の特徴を表す遺物を中心に概略を述べていく。なお五所川原産須恵器の窯跡名及び観察については、『五所川原須恵器窯跡群』（五所川原市教育委員会2003年）の窯跡名及び分類に基づいている。

第１期の出土遺物－土師器

第１期の遺構から出土する遺物量は少ない。土師器は甕で、器高が30㎝前後の甕と15㎝前後の小甕に大別できる。前者は底部のみであり、底面は砂底である。後者はロクロ成形で体部下半にナデ？（摩滅により不明）を施すものである（図24－20・21）。

第２期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、金属製品

土師器の器種は坏、甕、小甕、塝、鉢、大鉢である。全般的に略完形に近い個体が多い。数量的には甕が多く、次いで坏、塝・鉢・大鉢である。坏は、腰部がやや凹み、高台を強調するようなものがみられる（農道10号第９号竪穴住居跡）。内面に黒色処理を施すものもある（図61－53、農道28号第５号住居跡）。甕は、器高が30㎝前後のものと15㎝前後の小甕に大別でき、製作技法ではどちらも粘土紐巻き上げとロクロ成形があり、一般に粘土紐巻き上げ成形によるものは体部外面を頸部までナデ調整を施し、ロクロ成形のものは体部下半にナデまたはケズリ調整を施す。個体数は前者が多い。いずれの成形方法も、底面に砂が付着するいわゆる砂底もしくはヘラナデである。以上、土師器甕に関する技法的特徴は、本期以降第５期まで基本的に継続することから、以下の各時期ではこれら以外の特記事項のみ記すこととする。塝・大鉢は、直径35㎝、器高15㎝前後のものである。大鉢の形状は塝に類似し、内面に黒色処理を施すものである。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。体部外面に刻印を持つ略完形の坏（図113－17、農道30号第３号竪穴住居跡）が出土している。高野・持子沢窯跡支群で生産された可能性がある甕の胴部片が出土している（図113－19）。土製品は土玉が出土している。金属製品は鎌（農道10号第９号竪穴住居跡）、鍬鋤先（農道６号第４号竪穴住居跡）、刀子の一部（図63－78、農道28号第５号竪穴住居跡）がある。

本時期の出土遺物は、金属製品の農耕具の一群が出土していることに特色がある。遺跡周辺の開拓行為を示すものかもしれない。

第３期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品

土師器の器種は坏、壺、甕、小甕、塝、甑である。坏や甕は全般的に略完形に近い個体が多い。甕が多く、次いで坏だが少ない。坏は、器形がやや扁平なものと、腰部がやや凹み、高台を強調するようなものがみられる（図82－４・図86－31、農道25号第２・４号竪穴住居跡）。壺は、内面に黒色処理を施すものがある。塝は、農道27号１号竪穴住居跡から出土している。

須恵器の器種は、坏、壺、甕である。坏は略完形の個体が複数みられるが、壺や甕は少ない。坏は腰部がやや凹み、高台を強調するようなものがある（図89－35、農道10号第２号竪穴住居跡）。壺破片はⅠａ類に分類され、MD７・12号窯出土遺物に類似する（図28－31、農道27号第５号竪穴住居跡）。甕は農道28号第４号竪穴住居跡から出土しているものは（図59－49）甕Ⅱａ類に分類され、口縁端面はMZ６・７号窯やMD７・12号窯の出土遺物に類似する。農道30号第２号竪穴住居跡の堆積土から出土した甕底部は（図111－12）、外面の叩き目から前田野目窯跡支群で生産されたもの

に類似する。土製品は土馬、土玉や鉢・小鉢を模したミニチュア土器がみられるが、特定の建物跡・竪穴住居跡から集中して出土する傾向がある（農道10号第７号建物跡、農道25号第４号竪穴住居跡）。他に内耳土器（農道10号第７号建物跡）や羽口も出土した。

本時期では、前時期で出土を見た土玉のような祭祀行為を示す遺物が増加することに特徴がある。

第４期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、金属製品

土師器の器種は、坏、壺、甕、小甕、鍋、鉢である。甕が多く、坏は少ない。坏は大振りで器高が高く、内面に黒色処理を施すものがある。壺は、個体数が少ないが、肩部が最大径を測るいわゆるいかり肩で、口縁端面形が頸部から鋭角に外反し外側に面をとるもので、内面に黒色処理を施すものがある（農道２号第５号建物跡、農道８号第１号建物跡）。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。坏は火襷をもつものがみられ、壺は口縁端部の形態が、MD７・12号窯跡出土壺Ⅰａ類に類似する。甕は農道８号第１号建物跡で１個体が出土しており（第490集図41－23）、口縁端面形から甕Ⅰａ類に分類され、MZ６・７号窯出土遺物に類似する。壺は菊花文底部破片が出土し（農道８号第１号建物跡）、口縁部破片は壺Ⅰ・Ⅱａ類に分類され、KY１またはMZ６・７号窯出土遺物に類似するものである（農道10号第６号建物跡）。土製品は少ないが、複数の建物跡から出土している。甕や鉢を模したミニチュア土器、土玉、土鈴がある。また、羽口が出土している（農道８号第１号竪穴住居跡）。石器・石製品では磨石・砥石が出土し、金属製品は刀子（農道10号第６号建物跡）や紡錘車が出土している（農道10号第１号建物跡）。

本時期の出土遺物の特徴は、内面に黒色処理を施す土師器の増加である。

第５期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、金属製品

土師器の器種は、坏、壺、甕、鉢である。比較的坏が多くみられ、坏は扁平なものと器高が高いものがあり、器高が低い扁平な器型もみられる（農道２号第６号建物跡）。また内面に黒色処理を施すものもみられ、体部は丸味を帯びる（農道10号第３号竪穴住居跡）。広口壺のロクロ成形の個体には、内面に黒色処理を施すものがある（農道２号第６号建物跡）。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。壺はⅠａ類に分類され、MD７・12号窯出土遺物に類似するものがある（農道10号第３号建物跡）。また、Ⅰ・Ⅱｂ類に分類され、MZ６・７号窯のものに類似するものもある（農道11号第３号竪穴住居跡）。土製品は、壺や甕を模したミニチュア土器や土玉がある（農道10号第３号竪穴住居跡、農道11号第３号建物跡、農道30号第１号建物跡）。金属製品は、銅製鈴や円筒状鉄製品が出土している（農道10号第３号竪穴住居跡）。

本時期には前代に引き続き内面に黒色処理を施す土師器が使用されている。また、従来の祭祀に関する遺物のミニチュア土器や土玉のほかに銅製の鈴が出土しており、祭祀用具に変化がみられる。

まとめ

○平成21及び22年度のまとめ

縄文時代の遺構は土坑10基、焼土遺構5基、溝状土坑1基、平安時代の遺構は建物跡5棟、竪穴住居跡22軒、土坑59基、溝跡23条、掘立柱建物跡2棟、ピット82基、性格不明遺構1基、時期不明のものは土坑9基、溝跡1条、ピット36基、焼土遺構1基であった。遺物は段ボール箱36箱分が出土し、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・石器・土製品・金属製品がある。

特筆すべき成果として土師器製作遺構と土師器焼成遺構の検出があげられる。

土師器製作遺構は、農道27号で検出された第2号建物跡と第7号竪穴住居跡である。2軒とも土師器の材料と思われる粘土が住居南東隅に作られたピットに貯蔵されていて、第2号建物跡では北西隅に、第7号竪穴住居跡では南東部にロクロを設置したロクロピットが検出された。いずれも帰属時期はTo-a降下前の時期と思われる。

土師器焼成遺構は農道27号で検出された第24・25・30号土坑で、土師器製作遺構である第2号建物跡から約30m、第7号竪穴住居跡からは約6m離れただけの地点である。これら焼成遺構からは焼土・炭化物が出土し、底面や壁の一部などが被熱していた。出土遺物はほとんどないが、第30号土坑からは土師器甕の破片が出土したことから、土師器甕の焼成遺構であったものと思われる。また、平成20年度に検出された農道2号第2号土坑も土師器甕の焼成遺構とみられ、これを含めて本遺跡からは4例の焼成遺構が見つかったことになる。

○4ヶ年（平成19～22年度）のまとめ

中平遺跡は梵珠山系の南西麓に広がる扇状地性の低位段丘上で、標高35～40mの緩やかな小丘地上に位置している。小丘地の南北には東西に延びる開析谷が存在し、北側の谷上流部と南側の谷が堰き止められ、それぞれ吉野田新溜池、熊沢溜池として現在利用されている。小丘地頂部はりんご園造成のために削平され、ほぼ平坦となっている。中平遺跡の一部は、葛西覧造氏や角田文衛氏らによって縄文時代後期の土器を出土する「吉野田タケハラコ」という名称で昭和初期から知られていた。

県営野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う中平遺跡の発掘調査は平成19年度から4ヶ年にわたって行われ、検出した遺構数、遺物量等をまとめたのが表44である。農道14路線を調査したが、全体で約710,000㎡の広さを有する中平遺跡のうち、この4年間で調査したのは約20,000㎡、遺跡全体のわずか2.8％であった。一連の調査で特筆すべきは縄文時代後期の集落跡と平安時代の集落跡である。

縄文時代各時期の遺構・遺物が見つかったが、平成19年の農道6号の調査で見つかった後期前葉十腰内Ⅰ式期の大規模集落の検出は大きな成果である。柱穴状の各種土坑を中心に一部は亀甲形の掘立柱建物跡を構成して全体的に環状をなすもので、詳細は青森県教育委員会第474集『中平遺跡』2009で報告されている。近年の調査ではそれを補足・発展させる当該時期の遺構・遺物が見つかっていないため、ここではその内容には言及しないこととする。

平安時代の集落については、およそ9世紀前葉から10世紀後葉までに収まるようで、特に9世紀後半から10世紀前半に集落の盛期がある。平安時代の建物跡29棟、竪穴住居跡47軒が検出され、これら以外にも建物跡を構成する外周溝と思われる溝跡もあり、密度はさほど濃くないが広い範囲に住居が点在していたことが窺える。比較的密度が濃い地点は、大きく2ヶ所挙げることができる。1ヶ所目は、遺跡南側にある熊沢溜池とその支谷に面する台地縁辺部である。ここでは9世紀前葉から10世紀後葉まで長い期間にわたって集落が展開する。土師器製作遺構や焼成遺構も検出され、集落内での土師器生産に関する新資料を得た。B-Tm降下前には、農道9号・10号・27号において円形周

溝や方形周溝が造られており、遺跡の中に小規模な墓域が点在していた。２ヶ所目は、遺跡中央部で北西から入り込んでくる支谷の沢頭周辺部である。ここでは農道２号・８号で、10世紀前葉から中葉の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・外周溝がセットになる建物跡が主に検出されている。これら以外では、農道６号・７号及び農道11号北側において掘立柱建物及び外周溝を伴わない単独の竪穴住居跡が散発的にみられるが、浪岡野沢小学校及びその西側の緩斜面地帯は調査が行われていないためその様相は不明である。４ヶ年で検出された建物跡や竪穴住居跡を分析したところ、まず単独の竪穴住居が造られ、To-a降下前に竪穴住居と掘立柱建物がセットになり、To-a・B-Tm降下によって竪穴住居・掘立柱建物・外周溝の建物へと変遷し、その消長にはTo-aやB-Tmの降下がリンクしている可能性が考えられる。住居構造の変化は時期差だけではなく、天候不順による降雨量（降雪量）増加等の気候変化の影響を強く受けた結果であろう。

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・土製品・石製品・金属製品などがある。土師器は皿・坏・小甕・甕・壺・埴・鉢・大鉢・甑・ミニチュアなどがある。坏は、ロクロ成形・回転糸切りが主体で内面黒色処理を施すものは少ない。甕は輪積成形のものが主体でロクロ成形は比較的少なく、砂底が一定量存在する。また、農道８号から搬文土器を模倣した条痕が施文される土師器甕が出土している。壺には、外面上半ロクロ、下半ヘラケズリ、ヘラナデで、内面にミガキ・黒色処理を施すものがある。埴は輪積成形のもので、ロクロ成形はみられない。埴に類似した形状の大鉢は内面黒色処理が施され、ミニチュアには甕・壺・鉢などがある。須恵器には坏・甕・壺があるものの量的には少なく、五所川原産のものが卓越している。坏・甕・壺とも刻書がみられるが破片資料のためモチーフが不明なものが多く、壺底外面には菊花状調整を施すものがある。土製品は土鈴・土玉・土馬などがあるが、農道８号で出土した土器片錘や円盤状土製品は平安時代に使用された可能性がある。石器・石製品には砥石・玉など、鉄製品は鎌・刀子・鎌・鍬鋤先・紡錘車・筒状・錫杖状など、銅製品は紐部に特徴がある鈴がある。羽口や鍛造剥片も出土している。

遺跡全体からしてみれば、本発掘調査を行ったといえども、幅６ｍないしは幅８ｍのトレンチを14本設置し試掘・確認調査したのと同じ状況で、まだまだ多くの遺構が中平遺跡に眠っていることが明らかになったともいえる。この４年間の調査で縄文時代・平安時代の人々が残した生活の痕跡が多数みつかり、縄文時代後期前葉の様相や、これまで漠然としていた９･10世紀の様相を考える上で、看過できない新たな知見を得ることができた。調査にご協力くださいました皆様に感謝いたします。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1996　『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
青森県教育委員会　2001　『長淀池遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第311集
青森県教育委員会　2006　『野尻(3)遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第414集
青森県教育委員会　2008　『上野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第445集
青森県教育委員会　2008　『寺屋敷平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第450集
青森県教育委員会　2009　『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第474集
青森県教育委員会　2010　『上野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第486集
青森県教育委員会　2010　『中平遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第490集
五所川原市教育委員会　2003『五所川原須恵器跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
奥野　光　2002　「白頭山－苫小牧(B-Tm)テフラの年大学的研究－正確な年代決定のために－」
『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 』13
木村　高　2000　「津軽地方における平安時代の住居跡
－付属する掘立柱建物と外周溝の機能について」『考古学ジャーナル』462
工藤清泰　1996　「歴史時代　東北」『日本土器事典』
児玉大成　2008　「角田文衛博士と葛西覧造氏が紹介した薄手式土器
－タケハラコ遺跡出土の十腰内１式土器を中心に－」『青森県考古学』16　青森県考古学会
齋藤　淨　2008　「北奥出土の搬文土器について」『青森県考古学』第16号　青森県考古学会
浪岡町　2000　『浪岡町誌』第１巻
福澤仁之　他　1998　「年縞堆積物を用いた白頭山－苫小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代の推定」『汽水域研究』5
船木義勝　2011　「白頭山(長白山)10世紀噴火がもたらした「天慶出羽の乱」
－火山噴火災害と兵乱から探る白頭山苫小牧火山灰降下の暦年代－」
『みちのくの考古学－40周年記念論集』みちのく考古学研究会
三浦圭介　1995　「古代」『新編　弘前市史』資料編１

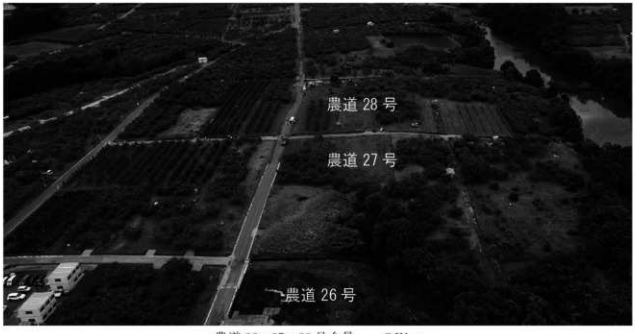
写真図版

－平成21年度調査－

農道2・26・27・28号全景　　E→

農道2号全景　　NW→

写真2　平成21年度調査路線（1）



農道 26・27・28 号全景　　SW→

農道 26・27・28 号全景　　SE→

基本層序C：農道 27 号 C-C' セクション　SW→

基本層序D：農道 27 号 D-D' セクション　N→

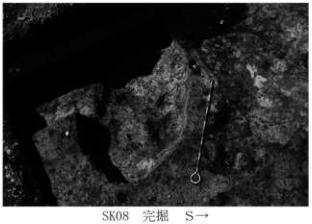
写真3　平成21年度調査路線（2）

農道２号調査区　N→

調査区（北東部）　完掘　N→

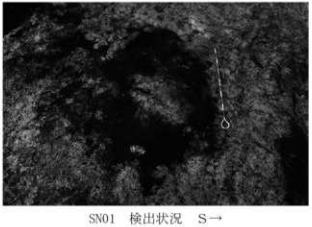
調査区（北西部）　完掘　ＳＥ→

写真４　農道２号（１）

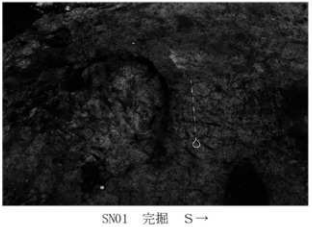


SK08　完掘　S→

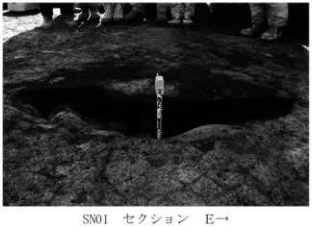
SK08　セクション　SE→



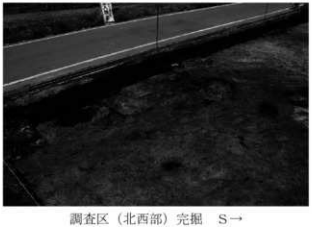
SN01　検出状況　S→



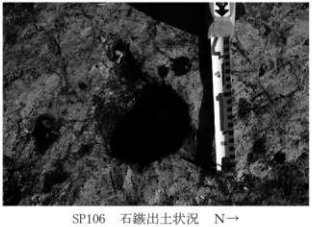
SN01　完掘　S→



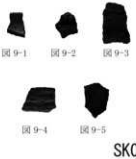
SN01　セクション　E→



調査区（北西部）完掘　S→



SP106　石鏃出土状況　N→



SK08
S=1/4

SP106
S=1/2

写真5　農道2号（2）

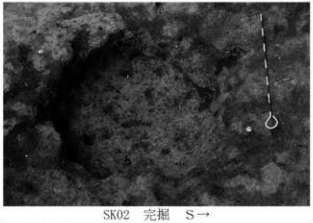
農道26号全景　　S→

26-１～９グリッド　完掘　ＳＥ→

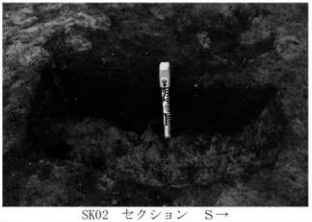
南半　完掘　NW→

26-10～17グリッド　完掘　ＳＥ→

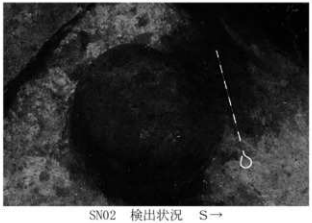
写真6　農道26号（1）



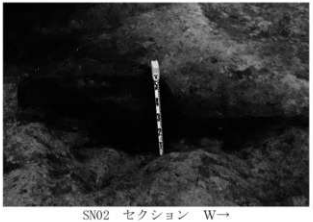
SK02　完掘　S→



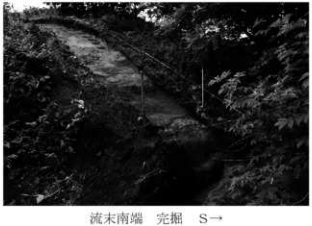
SK02　セクション　S→



SN02　検出状況　S→



SN02　セクション　W→



流末南端　完掘　S→

図 13-1　図 13-2　図 13-3　図 13-4

図 13-5　図 13-6　図 13-7　図 13-8

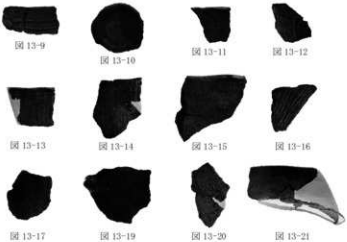


図 13-9　図 13-10　図 13-11　図 13-12

図 13-13　図 13-14　図 13-15　図 13-16

図 13-17　図 13-19　図 13-20　図 13-21

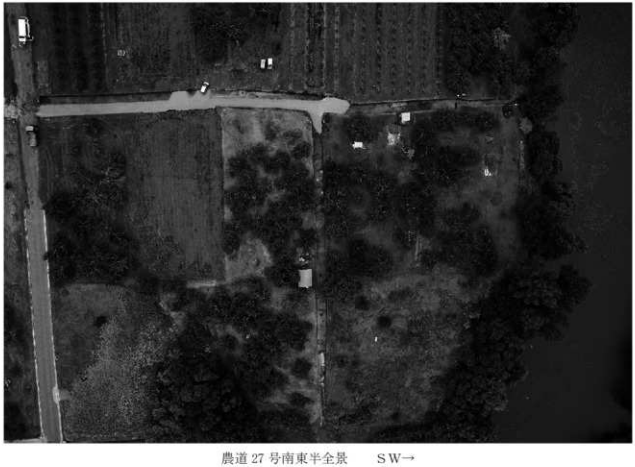
図 13-18　図 13-22

遺構外

S=1/4

写真7　農道26号（2）

農道27号遠景　　ＳＥ→

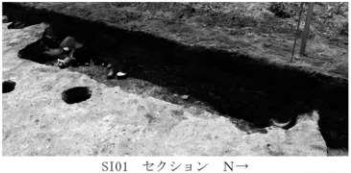


農道27号南東半全景　　ＳＷ→

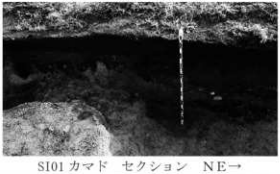
写真8　農道27号（1）

SI01　完掘　NW→

SI01　遺物出土状況　N→



SI01　セクション　N→



SI01 カマド　セクション　NE→

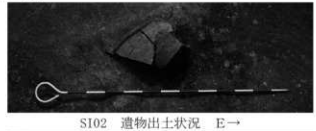
SI01 カマド　完掘　NW→

SI01 カマド　遺物出土状況　NW→

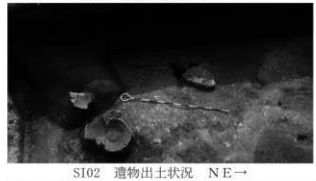
写真9　農道27号（2）

SI02　完掘　NW→

SI02　セクション　E→



SI02　遺物出土状況　E→



SI02　遺物出土状況　NE→

SI02 カマド　完掘　NE→

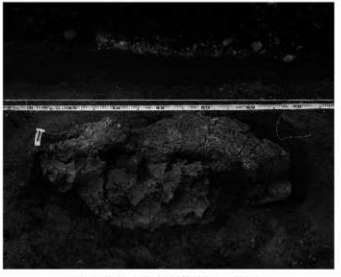
SI02 カマド　セクション　NE→

写真10　農道27号（3）

SI02 Pit1　完掘　N→

SI02 Pit1　セクション　N→

SI02 Pit3　粘土出土状況　E→

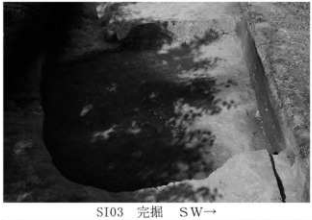


SI02 Pit3　粘土半截状況　SW→

SI02 Pit2　完掘　NE→

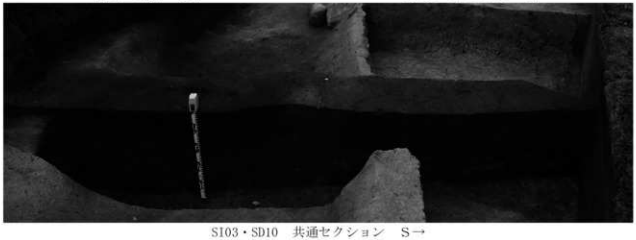
SI02　調査風景　SE→

写真11　農道27号（4）

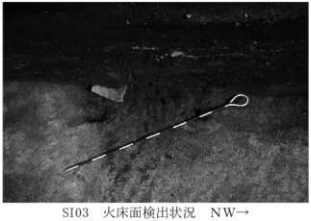


SI03　完掘　SW→

SI03　セクション　W→

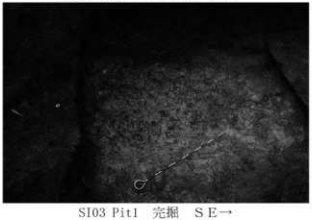


SI03・SD10　共通セクション　S→



SI03　火床面検出状況　NW→

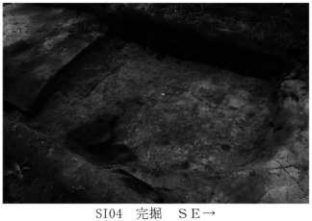
SI03　地床炉セクション　W→



SI03 Pit1　完掘　SE→

SI03 Pit1　遺物出土状況　SE→

写真12　農道27号（5）

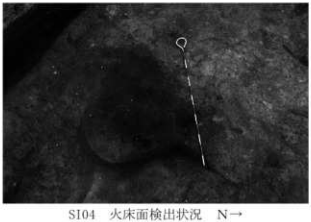


SI04　完掘　SE→

SI04　B-Tm 検出状況　SE→

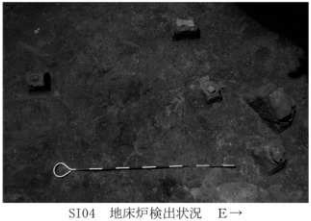
SI04　セクション　SE→

SI04　遺物出土状況　SE→



SI04　火床面検出状況　N→

SI04　火床面セクション　E→



SI04　地床炉検出状況　E→

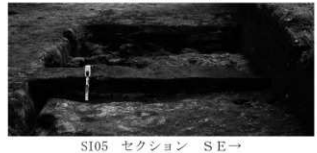
SI04　地床炉セクション　S→

写真13　農道27号（6）

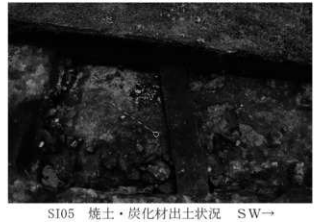
SI05　完掘　ＳＥ→

SI05　検出状況　ＳＥ→

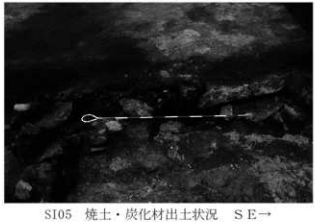
SI05　焼土・炭化材出土状況　ＳＥ→



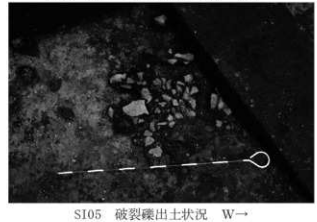
SI05　セクション　ＳＥ→



SI05　焼土・炭化材出土状況　ＳＷ→



SI05　焼土・炭化材出土状況　ＳＥ→



SI05　破裂礫出土状況　Ｗ→

写真14　農道27号（7）